市川市　令和元年度完了報告書

１．調査研究概要

本市では、児童生徒に「実生活で生きて働く力」を身に付けさせるために、各学校において「いちかわ学校三ヵ年計画」をもとに、PDCAサイクルを生かした教育課程の改善と指導の改善、教科横断的な視点を生かした年間指導計画の作成、人的物的環境の整備を行い、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」について、各校の研究テーマに沿って追求する研究を行ってきた。各テーマにおける研究内容は、以下の通りである。

(1) 学校の教育目標等の設定及び実現に向けた研究

○市川市立冨貴島小学校

「実生活で生きて働く読む能力」を身に付けさせたい資質・能力と設定し、この資質・能力を意図的・計画的・継続的に育むために、「いちかわ学校三ヵ年計画（創意と活力ある学校づくり）推進計画」等で検証し、実生活で生きて働く力の育成を目指す。

(2) 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

○市川市立宮田小学校

「人間関係形成能力（課題解決能力・コミュニケーション力）」を身に付けさせたい資質・能力と設定し、学級活動を軸として、「聴き合い」「話し合い」を意図的に設定し教科横断的なカリキュラムを構成し、実生活で生きて働く力の育成を目指す。

(3) 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

○市川市立第一中学校

地域や異校種の連携を基盤にした「学び合う力」を身に付けたい資質・能力と設定し地域の教育資源を活用したカリキュラムを編成し、PDCAサイクルを通じての実践・検証・改善を図り、実生活で生きて働く力の育成を目指す。

今年度は、カリキュラム・マネジメント検討会議及び各校への訪問等を通して、各校の既存の研究を生かした調査研究が行えるよう、有識者（聖徳大学教授）の助言を得ながら環境整備を行ってきた。その際、児童生徒の変容を評価する指標として、「いちかわ学校三ヵ年計画」による学校評価や、児童生徒及び教職員の自己評価をどのように生かすかについて検討を重ね、「いちかわ学校三ヵ年計画」を軸にした年間評価計画や、教職員・児童生徒向けの市川版評価表等を作成するなどして、次年度の調査研究に生かせるようにした。カリキュラム・マネジメントのさらなる充実のためには、児童生徒がどのように成長したかを分析することが大切であり、児童生徒の変容が具体的に読み取れるような評価の在り方を今後も検討していく必要がある。

また、県内外におけるカリキュラム・マネジメントの充実に向けた取組についての情報収集にも取り組んだ。先進地域、先進校に共通しているのは、カリキュラム・マネジメントが全教職員に意識化されている点である。本市のカリキュラム・マネジメント調査研究におい

ても、全教職員による検証ができるよう、意識を高めていく必要がある。全教職員でカリキュラム・マネジメントの充実に向けた実践に取り組むことで、教科横断的視点に立った年間指導計画の作成にもつなげていきたい。

（実践地域における年間実施スケジュール）

月	取組内容
９月	○事前検討会議①
10 月	○事前検討会議②
11 月	○各校での校内研究・研究発表会の実施
12 月	○第１回カリキュラム・マネジメント検討会議 ○担当者打合せ①
１月	○担当者打合せ② ○校内推進委員会（第１回カリキュラム・マネジメント検討会議を受けて） ○カリキュラム・マネジメント訪問（第一中） ○カリキュラム・マネジメント訪問（宮田小、冨貴島小）
２月	○第２回カリキュラム・マネジメント検討会議 ○実地調査 ○先進校視察（山形市　山形大学附属小学校、流山市　流山高等学園）
３月	○研究報告書の作成 ○市教育委員会による各校の取組検証

２．調査研究の内容

実践校【市川市立冨貴島小学校】

（１）　研究テーマ

☑　a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

□　b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

□　c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

（２）　調査研究の内容

平成２９年度から「主体的・対話的」に学びに向かう姿を目指して研究に取り組んできた。児童同士で目的をもって交流する場を意図的に設けることで、自分の読みを広げたり、深めたりと深い学びができると考え、取り組んできた。昨年度からは、「主体的・対話的」に加え、「系統的」をキーワードとし、各部会での指導事項や言語活動に系統性をもたせ、年間を通して児童に力を付けていくようにしてきた。

仮説

付けたい力を明確にし、系統立てて言語活動を行えば、児童は主体的・対話的に学習に取り組み、読むことの力が付いていくだろう。

「付けたい力を明確にし」とは以下の二つの内容を指す。

①どのような読む能力を育むのかを、児童の発達段階に応じて系統的に把握すること。

②当該単元でどの指導事項を取り上げて指導するのかを明らかにすること。

系統立てた「言語活動」とは以下の４つのポイントを押さえた言語活動である。

①児童が必然性・達成感を感じられる場面と学習のゴールを設定する。

…児童が「これならできそうだ」と思える、実態に即した魅力あるゴールを設定する。

②付けたい力（指導事項）との関連を明確にする。

…「この教材ではこれとこれを教える」「この教材ではこの言語活動を活発に行う」ではなく、ねらいに応じて柔軟に指導計画を構想する。

③学習過程（見通し）をわかりやすく示す。

…学習計画を児童にわかりやすい言葉で大きく掲示し、学習内容がどの場面にあたるのかをわかるように示す。（矢印で示す、既習事項がわかるような印をつける等）

④学習指導要領・国語科における「C　読むこと」の内容を踏まえる。

…指導事項の内容を系統的に捉え、これまでの学習で身に付けさせておくべき力は何か、その力が先の学年のどの力に繋がっていくのかを見通す。

（３）　調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

①読む力を付けるための言語活動の工夫と積み重ねについて

○成果

・指導事項マトリクスを活用し、読む指導事項について年間を見通して、単元ごとに系統的に指導することができた。

・児童の実態に応じて学習のゴールを設定し、教師モデルを明確に示したことで、児童が意欲的に取り組むことができた。

●課題
・読む力を付けるための言語活動にたくさん取り組んできたが、書く言語活動が多く、話す言語活動にももっと取り組めるとよかった。

②並行読書の吟味・情報活用能力の育成について
○成果
・学校司書と相談しながら、指導事項や言語活動に適した国語の教材文に関連する本や資料を選書できた。
・他教科領域の学習でも、図書館で必要な資料や情報を見つけることができた。
●課題
・教師が選書した図書資料はよく活用できていたが、日常の読書に広がる児童は少なかった。
・図書資料から必要な情報を読み取ることができるが、まとめることができない児童がいた。

③振り返り活動の充実について
○成果
・低学年は記号で振り返ったため、時間内で無理なく振り返ることができた。
・振り返りのポイントを提示することで、学習のめあてに合った振り返りをすることができた。
・前時の振り返りを見ることで、課題を把握したうえで、授業に臨むことができた。
・単元の最後の振り返りでは、どんな力がついたかを振り返ることができた。
●課題
・児童によっては、くわしく振り返りを書けていなかったので、どのような振り返りを行えばよいのか具体的に示す必要があった。

④日常的な言語生活の耕し
○成果
・国語科で学習したこと（新聞や作文、報告文など）を他教科の学習で活用することができた。
・スピーチや日記などに日常的に取り組むことで、話すことや書くことを習慣化できた。
●課題
・スピーチや日記などの取り組みが多かったので、様々な形式の「話す・書く」の取り組みができるとよかった。

⑤対話を意識した場の設定
○成果
・交流活動を積み重ねたことで、学習計画を立てる時に、交流したいという声があがるなど、必要感のある交流活動となった。
・一人一人が自分の考えを明確に持つことで、活発な交流活動となった。
・しっかりと図書資料の叙述に基づいた自分の考えを伝えることができるようになった。

●課題

・交流する前後での一人一人の変容がわかるような記録を残す必要があった。

・支援を要する児童において、グループで交流したことを活かすことができたが、共有に頼りすぎ、自分の考えをもてていなかったため、もっと自分の考えを最初にもてるような支援が必要であった。

来年度に向けて

今年度は、昨年度までの「主体的・対話的で深い学び」を生み出す言語活動の探究に加えて、特に研究仮説の「系統立てる」を意識し、年間を通して読むことの指導事項をどのように児童に身に付けていくか、計画的に取り組むことができた。また、年度初めに「主体的な姿」、「対話的な姿」、「深い学びの姿」を教員間で共有することで担当する学年に応じた姿をイメージし、系統的に指導することができた。

読むことに関しては、系統的に指導することができた一方で、話すこと・聞くこと、書くことの能力も併せて児童に身に付けていく必要がある。読む力を中心とした３領域を意識しながら国語科のカリキュラム・マネジメントを見直し、しっかりと取り組んでいくことが今後の課題である。

また、国語科で付いた力を他教科領域で活かしていくことが少しずつできてきている。しかし、年間を見通して他教科領域と関連させながら計画的に取り組むことには課題が残った。今後、国語科の中でのカリキュラム・マネジメント、「縦の系統」や教科間でのカリキュラム・マネジメント、「横の系統」を意識して年間を見通した授業改善が必要である。

（４）　実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
９月	公開研究会指導案作成
１０月	研究推進委員会（公開研究会に向けて）　公開研究会資料作成
１１月	公開研究会
１２月	研究推進委員会（公開研究会の振り返り）
１月	研究推進委員会（研究紀要作成について）
２月	研究紀要作成　研究推進委員会（今年度の振り返り・次年度の研究の方向性）
３月	研究全体会（今年度の振り返り・次年度の方向性） いちかわ学校三ヵ年計画（創意と活力ある学校づくり）推進計画 （今年度の振り返りと来年度の方向性）

実践校【市川市立宮田小学校】

（１）研究テーマ

☐　a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

☑　b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

☐　c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

みんなで楽しい学校生活を創り，「学びに向かう力」が育つ特別活動の実践
―学級活動における話し合い活動の充実を通して―

（２）調査研究の内容

○　「人間関係形成力」を育み自己有用感を高める、学級活動における話し合い活動の指導方法及び評価方法の工夫

○　「課題解決能力」を育む、各教科と往還する特別活動の効果的な教育課程の実践及び評価方法の工夫

（３）調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方法

○学級活動を中心にして、各教科での「話し合う」力に向上が見られた。

○子供たちのアンケートの結果から、

「学級活動を行うことで学校生活が楽しくなった」肯定的回答 94.0%

「友だちの話を聞く」「自分の考えを話す」「ルールを守って話し合う」肯定的回答 97.0%を上回った。

特別活動を教育活動の中心に据え、コミュニケーション能力を培いながら学び合える子供の育成を行ったところ、一人一人が「学校が楽しい」と感じている。

●特別活動の特質を生かした効果的な年間指導計画の作成と評価方法

・各教科の指導内容との関連（横断的つながり）

地域や社会とのつながり　成長や未来とのつながり（縦断的つながり）のある教育課程の作成

・課題発見能力をつけることにより、課題解決能力が向上する。

・質問紙によるアンケート以外の評価方法

（４）実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
9 月	**前期アンケートの結果分析　特別活動・能力の各教科領域・各部会ごとの振返りと改善** 第３回学校運営協議会（中学校ブロック合同開催）「宮田っ子の健康」調査実施
10 月	**第２回授業研究会指導案検討**　陸上部中学校との合同練習　２年いちかわ町探検
11 月	**第２回授業研究会指導案検討　印刷製本　カリキュラム・マネジメント研修会** 「宮田っ子読書集会」　６年地域職場体験　縦割り活動「アドベンチャー集会」①
12 月	**第２回授業研究会　第３回授業研究会指導案検討** **児童生徒質問紙と関連をもたせたアンケート、保護者・地域アンケート等を実施・分析** 第４回学校運営協議会　　縦割り活動「アドベンチャー集会」② ５年ヘルシースクール発表会　　吹奏楽部「千葉交響楽団派遣指導」 地域清掃活動（クリーングリーンマイタウン）
1 月	**第３回授業研究会指導案検討　印刷製本　第３回授業研究会　音楽科授業研究会** **児童・教職員アンケート実施**　１年お年寄りとの交流会　朝スポーツ
2 月	**平成３１年度　研究紀要原稿作成　伸ばせた資質・能力の整理と課題** **道徳科授業研究会　　算数科授業研究会**　　第５回学校運営協議会 朝スポーツ記録会　６年生を送る会
3 月	**研究のまとめと次年度に向けて　研究紀要印刷製本　道徳科との成果の共有** **研究報告書の作成** **校内推進委員会による検討会（次年度教育課程の編成に向けて）**

実践校【　市川市立第一中学校　】

（１）　研究テーマ

☐　a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

☐　b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

☑　c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

（２）　調査研究の内容

平成３０年度の全国学力状況調査によると、ボランティアをやってみたり、地域や社会

をよりよくするために何かを考えることがあったりすると、３％から５％正答率が高くなっている。これは、「学びに向かう力」「生きて働く力」に直接結びついている数値といえる。そこで、中学校教員だけでなく、地域の大人や高校生、高校教員など多様な人材からいろいろなことを学ぶ機会を増やすことにより、外部の学習支援者の方の生き方を知ることで「学びに向かう力」「生きて働く力」が向上することを検証したい。

今年度は、①年間を通して高校教員による院内学級での書写、美術の授業　②２年生が地域の各事業所へ訪問し行った職場体験　③高校生徒と一緒に行った地域清掃と話し合い　④高校生と一緒に高齢者へクリスマスカードを送付　⑤助産師さんによる命の講演会などを行った。

（３）　調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

「学びに向かう力」「生きて働く力」が向上することを念頭において、人的カリキュラム・マネジメントを実施した。検証のためのアンケートを実施予定だったが、新型コロナウイルス拡大防止の休校が続き、残念ながら検証できていないのが実状である。

（４）　実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
９月	高校教員による（書写、美術）授業（２月まで）
10 月	職場体験
11 月	地域清掃ボランティア
12 月	地域高齢者へクリスマスカード作成
１月	
２月	命の学習講演会
３月	検証のためのアンケートの実施

３．実践地域全体としての調査研究の結果明らかとなった成果や課題と改善方策

（〇：成果，●：課題）

〇各種検討会議や各校への訪問を通して、検討委員会のメンバーの中で各校の現状を把握し、共通理解を図りながら調査研究に取り組むことができた。

〇「いちかわ学校三ヵ年計画」を軸にした年間評価計画や、教職員・児童生徒向けの市川版評価表等の作成により、PDCAサイクルを生かした年間指導計画の作成に向けての見通しがより明確になった。

●各校の授業研究を参観する際の視点を明確にする必要がある。年度当初に授業公開についての情報を共有し、研究の趣旨とカリキュラム・マネジメントとの関連を確認したい。

●教科横断的視点に立った年間指導計画の作成をさらに進めたい。そのために、各校の研究の中心となる教科・領域からどのように広げることができるか、全教職員の参加による実践と評価を進めることができるようにしていきたい。

４．参考資料

①実践地域の取組の概要が分かるもの（概要書、全体構想プラン）

②カリキュラム・マネジメント検討会議の資料（第１回、第２回）

③各校の資料